

世界で読まれる村上春樹

日台の研究者が語る

台湾で小確幸現象
 曾教授は台湾の歴史を語り、日本の統治によって台湾の言葉となった日本語などから台湾と日本の密接な関係を挙げ、台湾における村上人気の一例として「小確幸」現象を紹介した。

小確幸は村上氏のエッセー『ランゲルハンス島の午後』などに出てくる造語で、小さいけれど確かな幸福を意味する。最近台湾ではメディアや広告に登場し、「小確幸」を店名にする喫茶店やホテル、整形クリニックもあるほどだ。

村上氏の言う小確幸は激しい運動をした後にビールを飲む喜びのように自己規制が伴うが、翻訳抜きで入ってきた台湾では日常の言葉として頻繁に使われる。背景に、感情を素直に表し、日本の文化を受け入れる台湾の国民性があると説いた。

川村氏は「村上文学は翻訳があっても世界文学になったが逐語訳・直訳は似合わない。韓国では『ルウエイの森』を『喪失の時代』というタイトルにする爆発的ヒットとなった。翻訳者は彼の文章を訳しやすいと

彼の記事を訳しやすいと言った。翻訳不能な言葉も出てくる」と指摘、原作の今日性を際立たせる「翻訳の手法が彼の作品にふさわしい」と語った。

講演後、高橋龍夫文学部教授の進行で両氏のデザインセッションが行われ、「村上春樹研究センター」の活動状況や、数年前、村上氏が最有力と

言われるノーベル文学賞の予想にも話が及んだ。人文科学研究所は2014年秋にも翻訳者である米国のシェイ・ルービ

ンズを迎え、村上作品をテーマにした講演会を開いた。

村上春樹はなぜ世界で読まれるのか。公開講演会「越境する村上春樹」(人文科学研究所)が12月12日、生田キャンパスで開催された。講師は台湾の淡江大学(新北市)に誕生した「村上春樹研究センター」主任の曾秋桂教授(日本文学)と、現代文学への鋭い批評で知られる川村湊氏(文芸評論家・法政大学教授)。学生や市民など150人が聴講した。

村上春樹はなぜ世界で読まれるのか。公開講演会「越境する村上春樹」(人文科学研究所)が12月12日、生田キャンパスで開催された。講師は台湾の淡江大学(新北市)に誕生した「村上春樹研究センター」主任の曾秋桂教授(日本文学)と、現代文学への鋭い批評で知られる川村湊氏(文芸評論家・法政大学教授)。学生や市民など150人が聴講した。

村上春樹はなぜ世界で読まれるのか。公開講演会「越境する村上春樹」(人文科学研究所)が12月12日、生田キャンパスで開催された。講師は台湾の淡江大学(新北市)に誕生した「村上春樹研究センター」主任の曾秋桂教授(日本文学)と、現代文学への鋭い批評で知られる川村湊氏(文芸評論家・法政大学教授)。学生や市民など150人が聴講した。

村上春樹はなぜ世界で読まれるのか。公開講演会「越境する村上春樹」(人文科学研究所)が12月12日、生田キャンパスで開催された。講師は台湾の淡江大学(新北市)に誕生した「村上春樹研究センター」主任の曾秋桂教授(日本文学)と、現代文学への鋭い批評で知られる川村湊氏(文芸評論家・法政大学教授)。学生や市民など150人が聴講した。

村上春樹はなぜ世界で読まれるのか。公開講演会「越境する村上春樹」(人文科学研究所)が12月12日、生田キャンパスで開催された。講師は台湾の淡江大学(新北市)に誕生した「村上春樹研究センター」主任の曾秋桂教授(日本文学)と、現代文学への鋭い批評で知られる川村湊氏(文芸評論家・法政大学教授)。学生や市民など150人が聴講した。

村上春樹はなぜ世界で読まれるのか。公開講演会「越境する村上春樹」(人文科学研究所)が12月12日、生田キャンパスで開催された。講師は台湾の淡江大学(新北市)に誕生した「村上春樹研究センター」主任の曾秋桂教授(日本文学)と、現代文学への鋭い批評で知られる川村湊氏(文芸評論家・法政大学教授)。学生や市民など150人が聴講した。

村上春樹はなぜ世界で読まれるのか。公開講演会「越境する村上春樹」(人文科学研究所)が12月12日、生田キャンパスで開催された。講師は台湾の淡江大学(新北市)に誕生した「村上春樹研究センター」主任の曾秋桂教授(日本文学)と、現代文学への鋭い批評で知られる川村湊氏(文芸評論家・法政大学教授)。学生や市民など150人が聴講した。

村上春樹はなぜ世界で読まれるのか。公開講演会「越境する村上春樹」(人文科学研究所)が12月12日、生田キャンパスで開催された。講師は台湾の淡江大学(新北市)に誕生した「村上春樹研究センター」主任の曾秋桂教授(日本文学)と、現代文学への鋭い批評で知られる川村湊氏(文芸評論家・法政大学教授)。学生や市民など150人が聴講した。

村上春樹はなぜ世界で読まれるのか。公開講演会「越境する村上春樹」(人文科学研究所)が12月12日、生田キャンパスで開催された。講師は台湾の淡江大学(新北市)に誕生した「村上春樹研究センター」主任の曾秋桂教授(日本文学)と、現代文学への鋭い批評で知られる川村湊氏(文芸評論家・法政大学教授)。学生や市民など150人が聴講した。

村上春樹はなぜ世界で読まれるのか。公開講演会「越境する村上春樹」(人文科学研究所)が12月12日、生田キャンパスで開催された。講師は台湾の淡江大学(新北市)に誕生した「村上春樹研究センター」主任の曾秋桂教授(日本文学)と、現代文学への鋭い批評で知られる川村湊氏(文芸評論家・法政大学教授)。学生や市民など150人が聴講した。

村上春樹はなぜ世界で読まれるのか。公開講演会「越境する村上春樹」(人文科学研究所)が12月12日、生田キャンパスで開催された。講師は台湾の淡江大学(新北市)に誕生した「村上春樹研究センター」主任の曾秋桂教授(日本文学)と、現代文学への鋭い批評で知られる川村湊氏(文芸評論家・法政大学教授)。学生や市民など150人が聴講した。

村上春樹はなぜ世界で読まれるのか。公開講演会「越境する村上春樹」(人文科学研究所)が12月12日、生田キャンパスで開催された。講師は台湾の淡江大学(新北市)に誕生した「村上春樹研究センター」主任の曾秋桂教授(日本文学)と、現代文学への鋭い批評で知られる川村湊氏(文芸評論家・法政大学教授)。学生や市民など150人が聴講した。



▲ 台湾の村上人気を紹介した曾教授



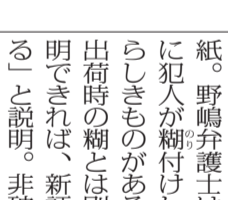
▲ 村上文学と翻訳について語った川村氏

奥西勝さん死去後第10次再審請求 「名張毒ブドウ酒事件」を考える 今村法律研究室が映画上映と講演会

冤罪問題や死刑制度の廃止に取り組む今村法律研究室(松岡啓祐室長)が12月12日、「名張毒ブドウ酒事件」を考える映画の上映と講演会を神田キャンパスで開いた。無実を訴え第9次の再



審請求中だった奥西勝元死刑囚は、10月4日に89歳で死去。司会の矢澤昇治法科大学院教授の呼びかけで黙とうがささげられ、事件のあらましと獄中の半生を描いた映画「約束」(仲代達也主演)が上映された。



事件は1961年3月に三重県名張市で発生。集落の懇親会で農薬入りのブドウ酒を飲んだ女性17人が倒れ、奥西さんの妻を含む5人が死亡し

た。会場にブドウ酒を運んだ奥西さんが疑われ、連日の厳しい取り調べの末「三角関係を清算するためにやった」と自白し、逮捕された。

後に否認に転じ、一審は無罪。二審では一転して死刑となり、72年に最高裁で死刑が確定。奥西さんは確定死刑囚として43年間収容された。その間、2005年の第7次再審請求でいったんは再審開始が決定されたが、

検察の異議申し立てが認められて取り消された。奥西勝弁護士の野嶋真人弁護士は「不条理な生涯で無念だったろうが、奥西さんの死に顔は『裁判を頑張った』と弁護団を励ますように安らがなかった」と紹介。奥西さんの妹が遺志を継ぎ、第10次再審請求を申し立てたことを報告し、過去の再審請求の争点を解説した。

今回の注目点となるのが、ブドウ酒瓶の封かん紙。野嶋弁護士は「裏面に犯人が糊付けした痕跡らしきものがある。製造出荷時の糊とは別物と証明できれば、新証拠になる」と説明。非破壊検査の機器を裁判所に持ち込み、復元した封かん紙で予備実験をしたうえで、証拠品の封かん紙の検査を実現させる方向で活動している」と語った。

一部学生を対象に、優れたGPAスコアを獲得した学生を学部として表彰するもので、欧米の大学では広く普及している。同制度の導入により、学生の学修意欲向上と就職活動支援、さらには欧米大学院などへの進学を希望する卒業生に対する支援が強化される。表彰は学期ごとで、対象期間は1年次前期から4年次前期まで。表彰基準は▽1年次

各学期あたりのGPA上位5%以内。最低修得単位数10単位▽2・3年次各学期あたりのGPA3.5以上。最低修得単位数10単位▽4年次通算のGPA3.5以上。最低修得単位数4単位。表彰者は掲示板などで学籍番号のみ掲示され、希望者には証明書を交付する予定。

今年度は2015年度入学者を対象に前期の成績に基づき、後期から表彰を開始。来年度以降も順次実施される。

※GPAとは、各科目の成績から特定の方式によって算出された学生の成績評価値、またはその成績評価方式。

大矢根ゼミは災害社会学を専門に長期的な被災地復興研究に取り組む。2013年同ゼミ卒業生による卒論の要旨や、昨年6月に生田キャンパスで行われた取り壊し予定施設での火災を想定した破壊消防訓練の模様などをパネル展示した。

大矢根ゼミは災害社会学を専門に長期的な被災地復興研究に取り組む。2013年同ゼミ卒業生による卒論の要旨や、昨年6月に生田キャンパスで行われた取り壊し予定施設での火災を想定した破壊消防訓練の模様などをパネル展示した。

自然科学研究所公開講演会

森林の働きと 景観の見え方

自然科学研究所(吉田治弘所長)の第18回公開講演会が12月12日、生田キャンパスで開かれた。「緑とランドスケープ」用と美しく」と題し、森林の働きと景観の見え方の両面から自然の姿に迫った。

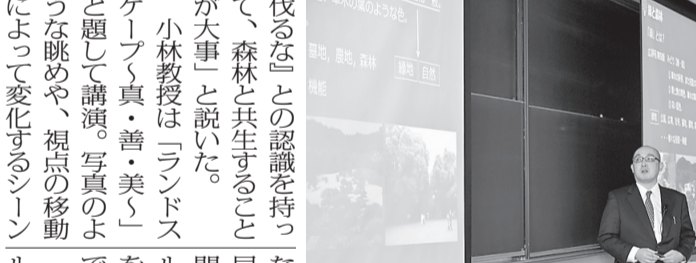
森林科学が専門の岡田准教授が講演。岡田准教授は「緑との共生をテーマにした講演会を開いた。

機能について解説。そのなかで海岸の潮風のもとで成立している海岸林に着目した。海岸特有の災害を防ぐ保安林としての役割と美しさを、特に津波減殺効果では東日本大震災でも津波の勢いを減らしたと説明した。

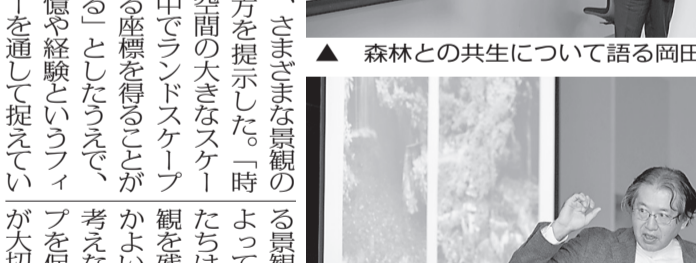
岡田准教授は「ランドスケープは生き物であるという意識を持ち、そのなかでも里山林(人工林)については適切な管理が必要。木を伐っても森は

伐るな」との認識を持つなど、さまざまな景観の見え方を提示した。「時間や空間の大きなスケールの中でランドスケープを見る座標を得ることができ」としたうえで、

「記憶や経験というフィルターを通して捉えている景観もあり、見る人によって見方が変わる。私たちはどういった形で景観を残すのか、美しいとかよいものとか、評価を考へながらランドスケープを保全・創出することが大切になる」と述べた。



▲ 森林との共生について語る岡田准教授



▲ 景観の見え方の具体例を示す小林教授

阪神淡路大震災の展示

大矢根教授とゼミ生の金丸隆史さん(4年次)は、1995年の阪神淡路大震災後の神戸市長田区の写真の展示。同教授の研究仲間である金原雅彦さんが、震災から毎年約700人が来場した。

「震災発生5年目ごろからようやく復興に向けて街並みが変わっていき、記録することの大切さが一枚一枚にこめられている」と大矢根教授は話す。当日は石巻専修大学からも若月昇名教授が研究・開発したランドセル型の電源「ユニバーサルモバイルコンセント」が紹介された。